

代表からのご挨拶

サンライズ・メイト・バート株式会社

代表取締役 井上 明美



いつも皆様方には、格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。自治体によっては、コロナワクチン接種がなかなか進まない中、何故こ

のような事態になってしまっているのか、皆様方には、もどかしい思いをされているのではないのでしょうか。コロナ禍の1回目の緊急事態宣言が発令された昨年から考えておくべきだったのではないかと残念な気持ちになります。本格的な夏をひかえ、いっそうご自愛ください。

サンライズの物語

なぜ人生に終わりがあるのか——

人の一生について考える物語



その方は、昨年ご主人を亡くされ、今も自宅でご主人の陰影をさがしておられる方でした。

ご主人は「フーテンの寅」をこよなく愛していたらしく、寅さんの映画をお正月には毎回観に行っていたのです。その度に寅さんの言葉は生きる力があると笑ったり泣いたりしていたとのこと。

なかでも「ああ生まれてきて良かった。そう思うことが何べんかあるだろう。そのために生きているんじゃないのか。そのうちお前にもそんな時が来るよ。な？がんばれ」いまさらながらに聞いてみると意味深い言葉だと思つたと話されていました。

最愛の人を亡くした悲しみ、辛さ、二度と戻ってこない現実に打ちひしがれて涙が零れる日々・・・ご主人の代わりはいないことに気が付き、それでも前を向かないと心が折れそうになると・・・

何故人間は死ななければならぬのだろう。そんな時に思うことは、子供たちには、同じ悲しみをさせたくない。叶わないことだけれど、今度は子供たちの人生を見届けたい・・・守りたい・・・と思うと話され泣いていました。

ひとりひとりの人生の終わり方、あとに残された家族の想いに胸がいっぱいになりました。

<チョコレートのマグネット作り>

チョコレートの形をしたマグネットを作りました。食べたくなるほど本物そっくりです！細かい作業ですが、とても綺麗に作って下さいました。



<壁面飾り>

夏らしいスイカの壁制作を皆さんと作りました。見ているだけで夏気分になります！



NEWS 今月のニュース

「花嫁姿見てもらえた」福島の 両親と涙の対面 コロナで昨夏 見送り

福島市出身で埼玉県に住む小亀秀子（しゅうこ）さん（42）は12日、夫の善隆さん（42）と同市飯坂町の介護老人福祉施設「県飯坂ホーム」を訪れ、入居する両親にウエディングドレス姿を披露した。新型コロナウイルスの感染拡大で諦めかけていた結婚式だったが、「花嫁姿を見てほしい」という秀子さんの熱意に周囲が応えた。「諦めなくて良かった」。両親を前に秀子さんの目から大粒の涙があふれた。

コロナ禍で結婚式を断念するカップルが増えている。小亀さん夫妻も昨年6月に結婚式を挙げる予定だったが、感染拡大を恐れて見送っていた。「やらないと後悔するようになるよ」。悩んでいた秀子さんの背中を押したのは、善隆さんの言葉だった。

だが全国的に介護施設での感染例も多く、同ホームに入居する両親の

出席は見送らざるを得なかった。それでも「今できる範囲のことをやりたい」と秀子さんの思いは強かった。関係者と相談し、感染対策を徹底した上で同ホームを訪れ、福島市で結婚式を挙げる事が決まった。期せずしてこの日は、秀子さんの誕生日とも重なった。

感染防止のため同ホーム内での対面はガラス越しだった。父本間藤三郎さん（79）と母ミチさん（77）に向かって大きく手を振る秀子さんと善隆さん。藤三郎さんは秀子さんのドレス姿を確認すると、車いすに乗るミチさんの手を取りながら「ほら、ほら」と何度も声を出し、小さく手を振り返した。

「みんな来てくれたよ」「ご飯ちゃんと食べてる?」。ガラス越しの対面を終え、玄関でミチさんが好きだというユリの花束を手渡した秀子さんは、涙が止まらなかった。コロナ禍で面会もできず、久しぶりの対面。秀子さんが涙ながらにミチさんの手を握ると、周囲で見守っていた親族のフェースシールドも涙で

曇った。

結婚式は福島市のクーラクーリアンテサンパレスで行われた。式の様子はテレビ会議システムで同ホームに配信され、藤三郎さんらが見守った。「結婚式を挙げていいかどうか、本当に悩んだ。でも、この状況でやれる範囲のことができて良かったです」。秀子さんは笑顔で涙を拭いた。娘の晴れ姿を見た藤三郎さんは、パーキンソン病を患うミチさんに寄り添いながら、ゆっくりとうなずいた。「いつの間にか大きくなったな。とても、きれいだった」



<福島民友ニュース

2021/6/14(月)>